

特攻隊戦没者慰霊顕彰会の歴史

－戦後派世代への慰霊顕彰の継承と固有性の喪失－

角田 燎

本研究は、特攻隊の慰霊顕彰を目的として行う特攻隊慰霊顕彰会についての研究である。特攻隊慰霊顕彰会という団体は、「特攻」の戦没者の慰霊顕彰をする団体である。だが「特攻」内部には、陸海軍の違いや指揮官と兵士の対立など、多様性と対立を孕んでいた。また、「特攻」の定義も明確ではなかった。そうした中で、特攻隊慰霊顕彰会は如何にして「特攻」として集い、慰霊顕彰を行ったのか。そしてそれをどのように戦後派世代へ継承させたのか。以上が本研究の研究目的である。

特攻隊慰霊顕彰会の前身である特攻観音奉賛会は、内部での対立がありつつ、特攻隊の元指揮官を中心に戦後すぐから「特攻」の慰霊が行われていた。指揮官たちが高齢化し、特攻観音奉賛会が解散状態になる中で、1980年代になって戦争体験世代の中の比較的若い世代の人々によって特攻観音奉賛会が再組織化され、特攻隊慰霊顕彰会が設立された。彼らは特攻の定義に苦慮しつつも、『特別攻撃隊』という陸海軍特攻隊を網羅した戦史を作る。ここでは、「決死」と「必死」である「特攻」は明確に異なると考える人々が多く、基本的にはそのように「特攻」は定義された。

内部に多様性がある中、彼らは「特攻」として集団化するために、「特攻」の戦史を作ることだけでなく様々な工夫を凝らした。その一つが、会報上での各地各部隊による慰霊祭や戦史の報告である。それらは、戦中の共通体験がない彼らにとっての名刺代わりであった。自分たちが何者であるのかを各部隊の「戦史」で語り、「秘話」を語る事によって説明し、現在の状況を説明するために慰霊祭の紹介をし、それらを通じて集団化していたのである。

そして、彼らが目指したのが「特攻」の顕彰であった。「特攻」という「特別」な戦没者の戦友である彼らとしては、戦中のような特攻隊員の称賛を求めたのである。そのために彼らは「特攻」の顕彰を行っていくのだが、その姿勢は「保守的」、「右派的」な姿勢と親和性が高かった。1990年代に入り、日本でアジア・太平洋戦争に対する侵略戦争認識が高まるなか、彼らはその認識や、その認識の背景にある「東京裁判史観」に対して猛烈に反発していく。特攻隊員や自分自身が侵略戦争の尖

兵であったという認識は、彼らにとって到底許容できるものではなかったのである。

そして、彼らは戦没特攻隊員のためにも「東京裁判史観」が蔓延する世情を矯正するために、「特攻」の精神と偉功を世に宣揚することを目指した。「特別」である「特攻」を世に伝えれば、世情を矯正できるのではないのか期待したのである。その一方で、「特攻」精神を日本の伝統や、「大東亜戦争」の各所に見出していく。それは、「特攻」が日本伝統のものであったという根拠になった。また、「大東亜戦争」の各所に「特攻」精神を見出すことは、「大東亜戦争」自体が「特別」な戦争であったと示すことに繋がった。だが、各所に「特攻」精神を見出すことは、本来の「特別」である「特攻」というスタンスを崩すことに繋がった。

一方、2000年代になると終戦から50年以上が経過したこともあり、戦争体験世代の減少と後継者の獲得が切迫した課題となる。彼らは、最終的に自衛官 OB に後継者としての期待をかけるが、自衛官 OB の勧誘は容易にはいかなかった。慰霊団体が多く、どこに入れていいのかわからないという意見が自衛官 OB から出る中、特攻隊慰霊顕彰会は「大東亜戦争」全戦没者を慰霊する団体との合併を模索する。

この合併は、結果的に理事などの反対により流れるが、合併案や「大和特攻」の「準特攻」認定から彼らが本来持っていた固有性（「特別」である「特攻」に対するこだわり）が失われているのが読み取れる。これは「東京裁判史観」を払拭する為に、「特攻」精神を広く「大東亜戦争」の各所に見出したことに影響されている。「大東亜戦争」の各所に「特攻」精神を見出すという事は、「必死」の攻撃であるが故に「特別」である「特攻」という従来の図式を崩し、「決死」である「大東亜戦争」の各所に「特攻」精神を見出したのである。その結果、「決死」的である「大和特攻」は「準特攻」として認められたのである。また、「大東亜戦争」の各所に「特攻」精神を見出すことや、「大東亜戦争」それ自体を「特別」な戦争であったと示すことは、彼らの慰霊顕彰の対象を曖昧化させた。その結果、「特攻」を「大東亜戦争」の一項目にする合併案が浮上したのである。また、「決死」である「大和特攻」が「準特攻」とし認められるのである。

「特攻」としての慰霊顕彰事業を戦後派世代に継承するのは容易ではなかった。現在の特攻隊慰霊顕彰会は、深刻な会員の減少と「大和特攻」の「準特攻」認定に付随する「特攻」の定義の揺らぎに悩まされている。

そして会員の減少の中、関連団体に所属する人などに入会を勧め、なんとか会を維持しようとしている。結果的に現在の特攻隊慰霊顕彰会は、関連団体の様々な人々が集っている。戦後派世代は戦争体験世代のように特攻隊への特別な感情を共有できず、共通の体験もない。また、慰霊顕彰の対象である特攻隊員との関係は薄く、彼らが「特攻」の慰霊顕彰として集団化するの難しかった。そんな中特攻隊慰霊顕彰会は、特攻隊を「感謝」や「決意」の対象とする、歴史認識を脱文脈

化した自己啓発的な特攻受容を進めている。それは、特攻隊員の物語を戦争や作戦の評価とは完全に切り離して、感謝や決意の対象とする特攻受容の在り方だった。戦後派世代の彼らを慰霊顕彰に向かわせる動機づけを確保する解決策として、自己啓発的な特攻受容が推し進められたのである。

特攻隊慰霊顕彰会は、戦友会等閉じた組織と比べ、開かれた組織であるからこそ慰霊顕彰という事業の継承は可能になった。だが、開かれているがゆえにそこに本来あった「固有性」は失われたのである。